

# この胸いっぱいの愛を

2005(平成17)年8月22日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝塩田明彦／原作＝梶尾真治『クロノス・ジョウンターの伝説』（朝日ソノラマ刊）／脚本＝鈴木謙一、渡辺千穂、塩田明彦／音楽＝千住明／出演＝伊藤英明／ミムラ／富岡涼／吉行和子／愛川欽也／勝地涼／宮藤官九郎／臼田あさ美／倍賞千恵子／中村勘三郎／金聖響（東宝配給／2005年日本映画／130分）

## 第2章

モチないあなたも映画で擬似恋愛

……2006年から20年前の1986年に突然タイムスリップ！ 舞台は北九州の門司。ホントに20年前にさかのぼることができれば、アレもしたかった、コレもしたかったと思うのは当然だが、それはあまりに厚かましい……？ 自分の生命と引き換えにしても、何としても実現したいこと——人間は誰もがそんな思いを持っているのでは……？ バイオリンと将棋を小道具(?)とし、20年の時空と人間の記憶をテーマとして描かれるこの物語は、感動がいっぱい！ 『いま、会いにゆきます』の好きな人なら、再度ハンカチが必要かも……。

### 飛行機内に集う(?)登場人物たち……

冒頭の舞台は2006年1月5日の空港内。ケイタイで連絡をとりながら、搭乗手続に急ぐ主人公の鈴谷比呂志（伊藤英明）は出張で、小学生の一時期を過ごしたことがある北九州の門司を訪れるところだ。機上の人となった比呂志は、百貨店のお弁当フェアの仕事のためとはいえ、次々と弁当の試食に挑戦……。何となく役得のあるいい仕事だと思っていたら、大まちがい。こりゃかなりキツイ仕事だ。

それはともかく、通路を隔てた隣の席でビール片手にこれをにがにがしそうに見ていたのは、19歳のヤクザの布川輝良（勝地涼）。さらにこの東京発、門司行きの224便に乗り合わせた客は、その名前どおり(?)影のうすい臼井光男（宮藤官九郎）や濃いサングラスをかけた盲目のおばあちゃん角田朋恵（倍賞千恵子）たち。

## なぜか20年前にタイムスリップ！

結論を先に言えば、224便にたまたま乗り合わせたこの4人が、なぜか20年前にタイムスリップして展開されるのがこの映画。もちろん比呂志が主人公だから、比呂志にまつわる物語が中心になるが、あとの3人も同じ立場だからそれぞれの物語が……？

2006年に現実に生きている人間が、突然20年前の1986年にタイムスリップすればヘンテコな感じになるのは当然。だって、比呂志は20年前の子供時代のヒロ（富岡涼）や大好きだった和美姉ちゃん（ミムラ）たちと出会うし、輝良は自分を産む前の母親布川靖代（臼田あさ美）に出会うのだから……？

## 小道具の第1はバイオリン

この映画の小道具の第1はバイオリン。本来和美姉ちゃんは、東京の音大をトップで卒業し、バイオリニストを目指していた前途有望な音楽家。ところがこの和美は、脳の中にできた原因不明の腫瘍によって右手に障害が……。こりゃバイオリニストにとって絶望的な事態であることは明らかうえ、その命すら保証できないコトに。その結果、比呂志が大好きだった和美は若くして死んでしまうことに……。しかし、20年前にタイムスリップした比呂志の登場によって、和美の運命は……？

## 小道具の第2は将棋

タイムスリップした比呂志が少年時代に門司で過ごしていたのは、祖母の鈴木椿（吉行和子）が経営する旅館。比呂志は小さい時、そこで和美とよく将棋を指していた。将棋を和美に教えてやったかわりに比呂志は和美からバイオリンを覚えてもらうことになったわけだ。そんなワケで、20年前にタイムスリップした比呂志はまずは和美と将棋のお手合わせ。そしてさらに同一人物の比呂志とヒロが20年の時空を越えて将棋対決！　そこで見せるあるクセが兩人に共通しているのは当たり前……？

## 誰もが知っているあの「名曲」！

幼稚園や小学校で楽器を手にした時最初に習う曲は『キラキラ星』。ドド ソ  
ソ ララ ソ／ファファ ミミ レレ ド／ソソ ファファ ミミ レ／ソソ  
ファファ ミミ レ／ドド ソソ ララ ソ／ファファ ミミ レレ ド

そして次に習う曲はコレ。すなわちド ドレ／ミ ミファ／ソ ラソミ／ソ  
ファミレ／ファ ミレド／ド ドレ／ミ ミファ／ソ ラソミ／ソ ファミ／レ  
ミレド／ソ ファミ／レ ソソ／ファ ミレド／ソ ファミ／レ ソソ／ファ  
ミレド／ド ドレ／ミ ミファ／ソ ラソミ／ソ ファミ／レ ミレド

さてこれは何の曲……？ 誰もが知っている名曲だが、この映画ではこの誰もが知っている名曲がバイオリンで再三演奏されるので要注目！

## ミムラの代表作になるかも……

この映画のヒロインはミムラ。『海猫』（04年）ではさすがに伊東美咲の美貌の前に一步引いていた（？）が、この映画では、ストレートの長い黒髪をトレードマークとして難病に苦悩する若い女性の姿を体あたりで演じている。何回も登場するバイオリンを弾く姿も十分サマになっているうえ、ハイライトシーンでの緊張感を失わない演技も立派なもの。

さらに番外編（？）として展開される「フケ姿」は初体験だろうが、今後の演技の幅を広げるステップとしてほしいもの。この映画はミムラの代表作となるのでは……？

## 脇役の3人にも拍手！

主人公の比呂志とともに、20年前にタイムスリップした3人がそれぞれどんな役割を果たすのかも、この映画の焦点の1つ。この脇役3人の物語も丁寧に描いているため、この映画は2時間10分と長くなっているが、それぞれのストーリーが説得力をもっているため、決して観客をあきさせることはない。とくに、『亡国のイージス』（05年）でいい味を出していたチンピラヤクザ布川輝良を演ずる勝地涼のツッパリ具合は最高！ 彼が最後に母親の布川靖代にかけける言葉も「想

定の範囲内」とはいえ、感動的！

また影の薄い白井光男と花を愛する男（中村勘三郎）との問答のシーンも、盲目の老婦人角田朋恵が盲導犬と再会するシーンも感動的！ この3人の脇役にも大きな拍手を送りたいものだ。

## 『いま、会いにゆきます』の好きな方にお薦め

「この手の映画」は、好きな人と嫌いな人に大きく分かれるはず。なぜなら、この手の映画は、いくつかの現実にはありえないつくり事を前提としてストーリーを組み立てていくから、まさに脚本の良し悪しが生命線。

中村獅童と竹内結子の共演で大ヒットした『いま、会いにゆきます』（04年）だってそもそもありえない前提の中で観客を泣かせたもの。

佐々部清監督の『四日間の奇蹟』（05年）にしても、同じようなつくりもののストーリーだが、そのような物語はまさに映画が得意とする範疇。しかし、そんなバカなつくり話は嫌いという人がいるのも事実だから、そういう人は、この映画についても拒絶反応を示すかも……？

しかし、『いま、会いにゆきます』を観て涙を流した人は、この映画でもきっと……？

## ハイライトはコンサート会場

最後のハイライトシーンにコンサート会場が設定される映画は、名作ぞろい……？ その第1はあの日本映画の最高傑作である『砂の器』（74年）。そしてそれに続くのは、私の大好きな中国映画の『北京ヴァイオリン』（02年）。『砂の器』はピアノ協奏曲だったが、『北京ヴァイオリン』はチャイコフスキーのバイオリン協奏曲すなわち「チャイコン」。

するとさて、この映画では……？ オーケストラの指揮者は、今各界から注目される若手指揮者の金聖響。比呂志の命がけの頼みを聞き入れたこの指揮者がとった行動とは……？ そしてその結果、和美がコンサート会場でフルオーケストラをバックに弾くバイオリン協奏曲は……？

2005(平成17)年8月23日記